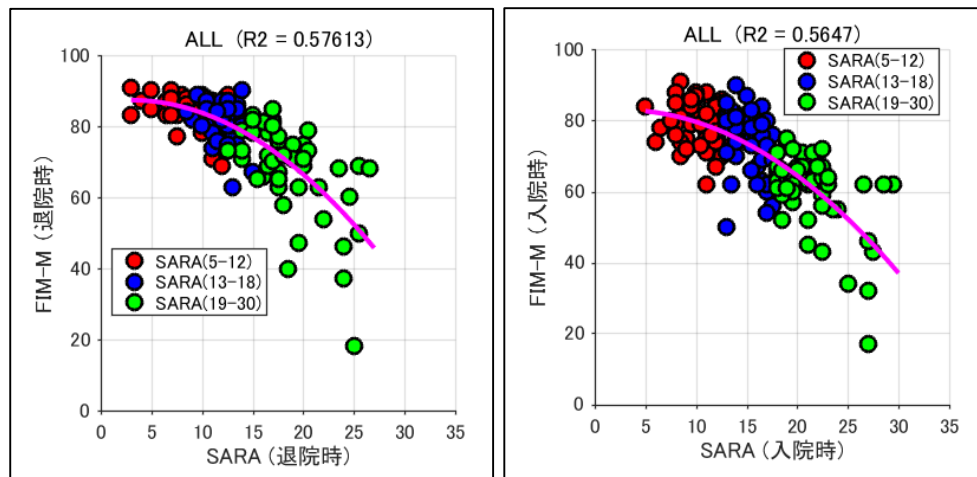
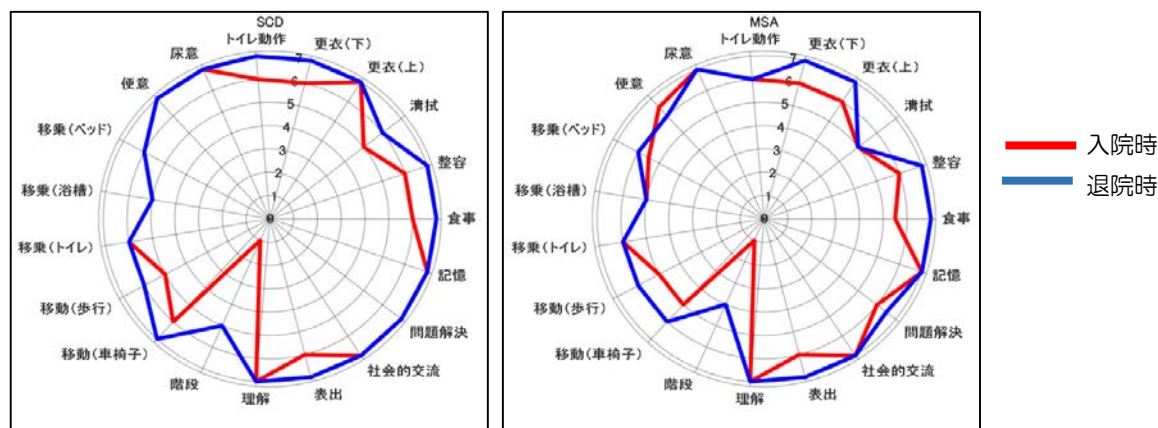


運動失調の重症度(SARA)と日常生活動作(FIM-M)の関連性



リハ前後のFIM下位項目の変化



研究分担者：宮井一郎 (大道会森之宮病院神経リハビリテーション研究部)、
 研究協力者：平松佑一, 乙宗宏範, 藤本宏明, 畠中めぐみ, 矢倉一(同上),
 服部憲明(大阪大学国際情報医工情報センター臨床神経医工学寄付研究部門)

【目的】

運動失調症に対するリハ効果を臨床尺度と動作分析や脳活動測定を関連づけて評価することにより、機能改善に寄与する運動学習や運動制御機構を明らかにし、科学的根拠のあるリハ介入の質の向上に寄与する。

【成果】

1. 脊髄小脳変性症84例と多系統萎縮症20例の延べ146回の約4週間の短期集中リハ前後のSARAとFIMのデータを収集した。それと並行して、動作解析装置による歩行時のデータやバランス保持時の脳活動データも収集した。
2. 病型に関わらずSARAやFIMに対する効果は同等であった。運動失調の増悪によりFIMが急峻に低下したが、失調以外の神経学的要因、廃用性要因の改善がより重度な群での改善に繋がった可能性がある。